文部科学省大学間連携共同教育推進事業

平成 28 年度 報告書

時代が求める新たな教養教育

京都三大学教養教育研究・推進機構

目　次

ごあいさつ

京都府立大学　あいさつ、大学紹介 …… 3
京都工芸繊維大学　あいさつ、大学紹介 …… 4
京都府立医科大学　あいさつ、大学紹介 …… 5
京都府知事あいさつ …… 6

はじめに

平成 28 年度取組の到達点 …… 7

第１部　教養教育共同化の展開

（1）平成 28 年度共同化授業の概要 …… 13
（2）共同化授業の受講状況 …… 14
（3）学生による自主企画活動の展開
ア　リベラルアーツ・ゼミナールから生まれた新入生歓迎講演会
－主体的な学びを引き出すビブリオバトルとオーサービジット－ …… 18
イ　宿泊型研修 …… 22
（4）京都三大学教養教育共同化フォーラム
「今、求められる教養教育　－京都からの発信－」報告 …… 29
（5）平成 29 年度における新たな取組の検討と新設科目 …… 37

第２部　時代が求める新たな教養教育像の探求

（1）平成 28 年度のリベラルアーツセンターの活動を総括して …… 41
（2）平成 28 年度の教育 IR センターの活動を総括して …… 46
（3）平成 28 年度共同化科目担当者会議と教員アンケートの概要 …… 48
（4）共同化科目の授業研究
ア　「京の意匠」における展示の活用 …… 50
イ　共同化科目「経済学入門」における大学ごとの履修行動の違い …… 51
ウ　The History of East-West Relations …… 53
エ　「経済＝人間の生活の営み」から始まるもう一つの経済学の試み
－授業科目「生活と経済」 …… 55
オ　東アジアの歴史をなぜ学ぶのか …… 61
カ　文芸創作論の教育実践：講義内容とパワーポイント活用の工夫 …… 64
キ　学生主体の能動的な対話的な深い学びの試論
－リベラルアーツ・ゼミナールⅠ「感覚で探る問題解決の方法」と「意外と知らない植物の世界」を通して思索する …… 73

ク　授業アンケートを活用した学習成果の把握
－「現代社会に学ぶ問う力・書く力」「社会科学の学び方」ゼミを事例として－…… 78
（5）質保証に関する取組成果の発信と共有
ア　1 年次生アンケートの蓄積と共有 …… 86
イ　IR コンソーシアム調査を活用した学科 FD の取組 …… 91
ウ　教員アンケートに見る授業改善の取組
－成績評価の多元化・学生交流・フィードバック－ …… 95
エ　京都三大学教養教育研究・推進機構における質保証システム
－カリキュラムの系統性と学習成果の把握－ …… 101
（6）三大学における教養教育の推進
ア　京都府立大学 …… 107
イ　京都工芸繊維大学 …… 109
ウ　京都府立医科大学 …… 111
（7）共同化教養教育の課題と展望…… 112

第３部　ステークホルダーと協働した外部評価

（1）平成 28 年度運営協議会開催概要 …… 119
（2）運営協議会座長コメント
－京都三大学教養教育共同化の取組について－（吉田　美喜夫　座長） …… 121
（3）三大学教養教育共同化に係る評価報告書（圓月 勝博　専門委員）…… 123
（4）外部評価コメントに応えて…… 127

資料編

京都三大学教養教育共同化による「新しい時代の要請に応じた教養教育」の実践 …… 131
平成 28 年度三大学教養教育研究・推進機構　運営委員会　委員名簿 …… 132
三大学教養教育共同化推進体制 …… 133
教養教育共同化施設「稲盛記念会館」…… 134
会議の審議状況、学会等参加状況 …… 136
平成 28 年度京都三大学教養教育共同化科目受講案内（抜粋）…… 141
京都三大学教養教育研究・推進機構　授業アンケート（様式）…… 151
京都三大学教養教育研究・推進機構　機構 1 年次生アンケート（様式） …… 152
京都工芸繊維大学の科目ナンバリングの導入に向けた進捗状況 …… 154
京都工芸繊維大学「科目ナンバリング分類表」…… 156
京都府立大学の教養教育におけるテーマ別学習のモデル（平成 29 年度学生便覧掲載予定）… 158
京都三大学教養教育共同化フォーラム（詳細）…… 161

京都府立大学

京都府立大学は、1895（明治 28 年）年に創立された京都府簡易農学校に源を発し、一昨年、開学 120 周年を迎えました。人文・社会・自然の諸分野にまたがる 3 学部・大学院 3 研究科を備えた総合大学であり、京都府における知の拠点として、小規模の利点を生かした密度の高い教育、高度かつ地域社会と密接に連携した研究、府内各地域の様々な課題に応える地域貢献活動や公開講座などを積極的に展開しています。

平成 26 年度からは、全国初となる京都府立医科大学、京都工芸繊維大学との教養教育共同化がスタートし、教養教育共同化施設「稲盛記念会館」で三大学の学生が一堂に会して学ぶとともに、府民の皆様等との多様な交流が一層促進されています。

また、現在は、日本初となる「和食文化の高等教育機関」を設置する準備を進めているところです。

京都府立大学学長
築山 崇

違いが生み出す創造の力

新カリキュラムが出発して 3 年。文科省助成事業の最終年度にあたり、昨年 11 月には、「今、求められる教養教育－京都からの発信－」と題してフォーラムが開催され、カリキュラムや学習の質・その評価等に関する成果とともに、学生が主体的に取り組んだ活動の報告も行われました。

共同化教養教育は、3 つの課題を掲げ展開されてきましたが、その中で、「世界の人々の多様な生き方を感受し、人としての豊かな感性や倫理観を拡張すること」という課題は、近年の世界の動きを見た時、とてもタイムリーで、「京都モデル」の発信にふさわしいものとなったと思います。

EU に象徴される「国境を超える経済、越えられない政治」といった問題、進む温暖化のなかでの人間と生態系の関係の問題など、明日の世界への展望を切り拓く学びを教養教育において実現していく試みとしての成果を見て取ることができると思います。

とはいえ、決して完成形に至ったわけではありません。上回生向け新規科目の開設など、次年度に向けて既にいくつかの新しい試みが決まっています。三大学相互の違いが生み出す創造の力が、これからも京都モデルの不断の更新を約束してくれていると思います。

京都府立大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構　運営委員長
野口 祐子

平成 24 年度に採択された文部科学省「時代が求める新たな教養教育の京都三大学共同（モデル）推進事業」は最終年度となります。この取組で着実に成果を出すことができたのは、まずもって文部科学省と、全面的に支援してくださった京都府のおかげであり、ここに感謝いたします。また協力して幾多のハードルを乗り越え画期的な取組を実現した三大学教職員の皆様にも御礼申し上げます。

この一年は、取組の成果を検証するとともに、次年度以降の展開に向けて着々と準備を進めた、多忙でありながら充実した一年となりました。11 月には本事業の成果を発信するフォーラムにおいて、三大学学生の混成 7 グループが共同化授業や宿泊研修による学びの深化について発表してくれました。彼らの成長が本事業の成果であり、私たちの励みです。

平成 26 年度後期から三大学の学生が利用している教養教育共同化施設「稲盛記念会館」に加え、隣接地で建設中であった「京都府立京都学・歴彩館」も平成 29 年から利用可能となり、京都北山の地が、文化交流・学生交流・国際交流の中心地として発展していく素地ができました。本共同化事業がその磁場の一つとして重要な役割を果たしていけるよう、今後もその成果を広く学外へも発信してまいります。

京都工芸繊維大学

京都工芸繊維大学は、明治時代の工業化や伝統産業の近代化に対応するために設立された京都高等工芸学校および京都蚕業講習所に端を発します。時代の進展とともに110余年にわたり発展を遂げながら、伝統文化の源である古都の風土の中で、「知と美と技」を探求する独自の学風を築き上げてきました。この栄光ある歴史に新たな一頁を加えるべく、豊かな人間性にもとづく技術の創造をめざして技を極め、人間の知性と感性の共鳴を求めて知と美の融合をめざし、教育研究の成果を世界に発信しています。

本学の特色としては、ものづくりを基盤とした「人に優しい実学」を目指した個性ある教育研究を行っているところです。

京都工芸繊維大学学長

古山 正雄

3大学連携による教養教育の共同化事業を大きく発展させたことには、二つの要素があります。一つは、平成24年度に、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業の補助金に採択されたことであります。これにより、教養教育の共同カリキュラムを構築する上で、財政的な支援を受けることができました。また、京都三大学教養教育研究・推進機構が中心となり、学年暦や受講登録、成績管理の方法など教養教育を共同して実施するにあたって必要となる具体的な事項に関して、3大学で意見交換をすることができました。もう一つは、京セラ株式会社名誉会長の稲盛和夫様より御寄付があり、平成26年9月に教養教育共同化施設の建物が整備されたことであります。これにより、3大学の学生が同じ場所で共に学ぶ環境が整いました。稲盛様は勿論のこととして、ご調整していただきました京都府の山田知事や関係各位にも、感謝の意を表したいと思います。

現代社会は、大量消費社会がもたらした資源の枯渇、地球的規模の環境悪化、経済社会のグローバル化、頻発するテロや増え続ける難民など深刻な諸問題に直面しています。一方、日本国内においても急速に進む少子高齢化、格差の拡大などを背景として、私たちは様々な社会問題を抱えています。

このような状況下において大学は、すべての学生に自らが専攻する専門分野とは別に人文･社会･自然にわたる幅広く普遍的な知を学習させ、倫理観や歴史観、国際的な視野を持たせる責務があります。

このことから本学では、人間形成に必要な教養を涵養し、科学技術と人間性との調和・融合を図ることができる広い視野と感性を備えた高度専門技術者を育成するための教育を実施してきました。今後も地域コミュニティの中核的存在として、様々な課題を解決することができる人材を輩出することが求められており、それに応える教育を実施していきます。

京都工芸繊維大学理事・副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構　運営委員

大谷 芳夫

府立2大学と本学が共同して新たな教養教育に取り組もうという試みは、構想から約10年にわたる粘り強い努力の結果､平成26年度から「京都三大学教養教育共同化」事業として結実し、3年が経ちました。他学部の学生と共に教養教育を受けることは総合大学では珍しくありませんが、学生としての根本的なアイデンティティーである「所属大学」の異なる学生が共通の場で学び議論するということは、他では得られない貴重な体験であり、まさに「時代が求める新たな教養」の涵養に資すると確信しています。

当初は、まず着実にこの事業を推進するための組織作りや、授業及び定期試験の実施体制整備など、運営上の基礎固めの作業が中心でしたが、現在では、これまでに得られた様々な経験と知見に基づいて、事業をさらにブラッシュアップするための模索が行われています。今後とも、この事業がさらに大きく発展するよう、引き続き努力したいと思います。

京都府立医科大学

京都府立医科大学は、病気に苦しむ京都の人々を救うために、住民がお金を出し合って、1872（明治5）年に設立された145年の歴史を誇る有数の歴史と伝統を有する医科大学です。

本学ではこのような歴史と実績により蓄積された医学や医療技術を背景に、高い倫理観を持ち、患者の立場に立って考える優れた医療人の養成や多様な学際的研究活動を推進し、世界トップレベルの医療人材や次代を担う指導的人材を育成しています。

また、京都府民に開かれた大学として、地域医療への理解と関心、使命感を持った医学研究者や医療人を育成するとともに、最先端の研究や診療機器の整備を行うことにより世界トップレベルの医療を地域に提供し、府民等の健康増進に寄与しています。

京都府立医科大学副学長
京都三大学教養教育研究・推進機構　運営委員
渡邊 能行

京都府立医科大学では、過去5年間、文部科学省大学間連携共同教育推進事業の支援を得ながら、京都工芸繊維大学と京都府立大学と一緒になって「三大学教養教育共同化事業」を進めてきました。この間、本学としましても、新築されました「稲盛記念会館」の外観に負けない充実したシラバスにすべく、関係教員が中心となって取り組んで参りました。医学・看護学という専門領域の殻に閉じこもるような医師・看護師等ではなく、府民・国民から信頼される人としての幅と深みを持った高度専門職人となるべく、その基礎となる普遍的価値を身に着けていくことが必要です。限られた人数の本学教員からだけでなく、京都工芸繊維大学と京都府立大学の先生方から提供していただく科目も含めた幅広い叡智を身に着けていって欲しいと思っています。他方で、それぞれの専攻分野における将来の社会のリーダーを目指す京都工芸繊維大学と京都府立大学の学生の方々には、生きていくための基礎をなす医学・医療についての理解を深めてもらうために平成29年度には「医学概論」を2回生以上の上級学年を対象として開講することにしております。是非、次代のリーダーとして医学・医療の方向性を理解していただきたいと思います。

京都府立医科大学を取り巻く昨今の状況は本学開学145年の歴史の中で最大の危機と言っても過言ではないと極めて深刻に受け止めています。私ども教員は改めて襟を正し、本学の存在理由である府民への最善の医療の提供と京都府の医療界を支える次世代の医師・看護師等の医療職の育成をとおして信頼回復に全力で取り組んでいかなければならないと考えています。

「世界のトップレベルの医学を府民の医療へ」をスローガンとして、地域で培ってきたものを世界に発信することが本学の進むべき道です。そのために、本学入学後最初に学ぶ教養教育は将来の医療人としての第一歩となるべきものであり、医学科・看護学科第一学年の学生諸君には本学への入学を目指した初志を忘れることなく自らが医療人たり得る存在であり続けることができるのかどうかを自問しながら自ら学んでいって欲しいと思います。

最後に、これまで行ってきました「三大学教養教育共同化事業」の中で培ってきました学生と教員との双方向の相互理解をベースに更に地に根を張っていくように教養教育共同化を進めてまいりたいと考えております。

京都府知事
あいさつ

京都府知事　山田 啓二

現在、私達を取り巻く社会環境は、急速な少子高齢化やグローバル化の進展など、今までに経験したことのない様々な課題に直面しております。

このような課題を乗り越え、我が国を支える人材を育てることは社会全体の使命であり、そのためには、大学教育においても、豊かな人間性と高い倫理観を涵養するための教養教育がますます重要になってきているところです。

京都府立大学、京都府立医科大学及び京都工芸繊維大学の三大学は、それぞれが 100 年を超える歴史を持ち、国内外で活躍する有為な人材を多く輩出してきましたが、一方で、個々には規模が小さく、各大学で提供できる教養教育科目には限りがあったところです。

そのため、国立・公立の設置形態の違いを超えて三大学で教養教育を共同化することにより、幅広いカリキュラムを提供することとされたところであり、京都府としても、この取組を支援するため、共同化科目を開講する教養教育共同化施設を、この趣旨に御賛同いただいた京セラ株式会社名誉会長の稲盛和夫様からも御寄附をいただき、整備したところです。

平成 26 年 4 月から教養教育共同化をスタートして間もなく 3 年となりますが、この間、三大学学生の教養教育の科目選択幅が大幅に拡大するとともに、大学間の学生の交流が進むなど成果が出ており、また、京都という地の歴史的、文化的特色を生かした「京都学」や、学生同士が共通のテーマで対話し議論する力を育む「リベラルアーツ・ゼミナール」、過疎化の進んだ地域を三大学の学生が訪れて住民とふれあい、議論を重ねることで地域課題の解決策を考える宿泊研修など、特徴的な取組も実施いただいております。

今後は、三大学の学生の皆さんが、同じ場所で共に学ぶ中で、授業だけでなく、スポーツ、文化などの面においても、今までにない人間関係の広がりや交流が生まれ、それを通して豊かな人間性を身につけられることを期待しますとともに、三大学が、地域を担う人材や世界に羽ばたく人材の育成のため、連携することにより広がる学問分野を生かし、相乗効果をあげる方向で、既存の枠組みを打ち破るような新しい大学教育を目指し、一歩ずつ着実に前進していっていただきたいと考えているところであり、そのため、京都府としても、三大学の取組を引き続き応援してまいりたいと考えております。

はじめに

平成 28 年度取組の到達点（総括コメント）

京都三大学教養教育研究・推進機構　運営委員長
京都府立大学　副学長
野口　祐子

平成 28 年度は共同化授業の開始から 3 年目となり、多くの点で改善を行った結果、事業が軌道に乗って動くようになった。三大学学生の交流が一段と進んだことが最大の成果と言える。それと共に今年度は、文部科学省の大学間連携共同教育推進事業の 5 年目を迎え、次年度以降の事業の継続・拡充に向けて、三大学が協力して方策を練り具体化してきた一年でもあった。はじめに総括コメントとして、運営委員長の立場からこの一年間の活動を振り返り、今後の展開について述べたい。

共同化授業の実践とその成果

平成 28 年度の共同化授業では、三大学の履修者の増加とともに、交流率も増加した。その理由のひとつには、今年度も履修定員の調整方法を改善した結果、学生の履修希望に沿えるシステムを構築できたことが挙げられる。また、年度当初のガイダンス時に、共同化授業を受講した上回生から説明をしてもらうなど、学生を本事業の担い手として参画させたことも履修者増に貢献している。詳細は後述の共同化授業の受講状況とリベラルアーツセンターからの報告をご覧いただきたい。

学生間交流については、交流率の増加という量的な面だけでなく、三大学の学生が一つのテーマに取り組み、ディスカッションや発表を行うといった、アクティブ・ラーニングの実践で交流を深める質的な面での充実が見られる。本事業が授業担当者にも、学生間の交流機会を設ける工夫をするといった変化を促し、教授方法の改善にも結びついていることが、授業担当者へのアンケートでもわかる。

特に三大学学生の交流を促進している科目群として、本事業の特色であるリベラルアーツ・ゼミナールがある。これはテーマを絞って、多様な価値観・志向を持つ学生同士が議論する力を高める少人数ゼミであり、学生にとって大学での学びを実感できる科目として評価が高い。平成 28 年度は 9 科目開講した。平成 29 年度はこの科目群をさらに増やす予定である。

三大学学生の交流が実を結ぶ

今年度は学生間の交流が、学生主体のイベントとして実を結んだ年でもあった。まず 4 月の新入生歓迎企画では、学生が企画から運営まですべてこなして、内田樹氏講演会を実現させた。当日は稲盛記念会館で三大学の学生・教職員、府民が一緒に内田氏と意見交換し、グループディスカッションする貴重な機会となった。

9 月には石田リベラルアーツセンター長が引率者となって、三大学の学生が京都府綾部市の豊かな自然と産業、直面する課題等を体験し、協働して課題解決策を提案する宿泊研修を行った。学生たちにはかけがえのない体験となったので、今後も継続していく方向で現在検討中である。学生たちが宿泊研修で何を学んだかについては、後述のリベラルアーツセンターからの報告に詳しい。

三大学学生の交流の成果は、11 月に開催した京都三大学教養教育共同化フォーラムにおける学生自身の発表からも明らかになった。フォーラムは、まず交流の象徴的存在である京都三大学合同交響楽団の演奏から始まった。本フォーラムは文

部科学省助成事業の最終年度に5年間の成果を総括し、新しい教養教育の形として「京都モデル」を学内外に発信する目的で開催したものであるが、その中心をなしたのは、共同化教養教育を受けた三大学の学生グループ7組の発表であった。学生たちが自らの学び・気づきを披露し、今後の改善に向けての提案をおこなってくれたことは、本事業の成果をまさしく体現するものであった。発表の最後を「ゼミ形式を増やして!」の連呼で締めくくったグループがあったが、その発表からは、本事業の特色である少人数制のリベラルアーツ・ゼミナールが今日の教養教育に果たす役割を学生たちがしっかりと受け止めて、生き生きとグループ・ディスカッションや発表に取り組んだことが伝わった。本フォーラムでは、最後に同志社大学副学長の圓月勝博教授からご講評をいただいたが、その中でもリベラルアーツ・ゼミナールが学生たちの主体的な学習を促す学びの体験を与えることに成功しているとして高評価された。本フォーラムの詳細については、リベラルアーツセンターの藤井特任准教授の報告をご覧いただきたい。

前述したように、平成29年度はリベラルアーツ・ゼミナールを増やす予定であり、学生の要望に応えることができる。

質保証の取組

三大学共同化教養教育は、異なる大学・分野の学生が混在する授業で、各大学のみで行っていた教育ではなし得なかった新たな教養教育を生み出す取組であり、三大学の教員が個々に、これまで通りの授業を行っているだけでは新たな化学反応は期待できない。そのため本事業の立ち上げから教育IRセンターを中心に、共同化授業の質保証に取り組んできた。今年度も引き続き、授業評価アンケートによる学生の学びへの態度と教育目標の達成度の測定、1年次生アンケートによる満足度調査を取組の改善へと結びつける活動、および教員アンケートと科目担当者会議による、共同化教育の課題の把握と授業改善に取り組んだ。今年度の取組の詳細については、大倉教育IRセンター長の報告をご覧いただきたい。

外部評価によるモニタリング体制

本取組のように、前例のない事業として立ち上げ、長期にわたって展開する取組については、外部識者の助言を取り入れることが肝要である。本取組では外部評価体制として、大学コンソーシアム京都理事長をはじめとする外部識者をメンバーとする三大学運営協議会が組織されている。今年度も平成29年1月に開催し、委員の皆様から本取組の成果、特に学生間の交流が進んでいることを高く評価していただくと同時に、今後さらに多様な交流を進めるべきこと、そして共同化事業のモデルとして全国の大学へと発信すべきであるとの励ましをいただいた。本取組が三大学の学生にとっていかに必要なものであるかについて委員の皆様からご発言があり、取組の趣旨に深く共感していただいていることに感謝申し上げると共に、本取組への期待の大きさに改めて感じ入り、襟を正した次第である。当日の座長を務めてくださった大学コンソーシアム京都理事長である吉田美喜夫立命館大学長には、今日の大学が目指すべき教育の観点から、当日の議論も踏まえたコメントを本報告書にお寄せいただいたことに感謝したい。

平成26年度に運営協議会専門委員を委嘱して

意見書の作成をお願いした同志社大学の圓月副学長には、今年度も専門委員を委嘱した。圓月氏による評価報告書では、本取組の特色として、大学間の協働に伴う諸課題を克服して学生の異分野交流を実現したこと、京都で学ぶメリットを生かした京都学科目や少人数でのアクティブ・ラーニングの実践等が高く評価されている。今後の課題として、学修成果の測定という困難な課題への対応も含めて、本事業が新しい教養教育のモデルとなり、その成果が他大学にも波及することが期待されている。

成果の発信については、11 月のフォーラムの他、本機構の林特任教授と児玉特任准教授が学会等で本取組の発信に努めてきた。平成 29 年 3 月 4 日・5 日に京都府立大学を会場校として開催される大学コンソーシアム京都主催第 22 回 FD フォーラムにおいては、1 日目のシンポジウム「大学の教育力を発信する」で、児玉准教授がコーディネーターを務め、林教授がシンポジストのひとりとして登壇し、三大学共同化教養教育の取組を取り上げる。このシンポジウムには全国から約 700 名が参加予定であり、三大学の取組を発信する絶好の機会となる。2 日目にはポスター発表も予定している。

次年度以降の展開

今年度は文部科学省助成事業としては区切りとなるが、年度当初の三大学による協議で、次年度には開講科目と開講時間を拡大し、上回生用科目を含む新規科目の開発を行うことで合意し、一年をかけて準備を進めてきた。三大学が協力して新規科目の開発に取り組み、学外の機関・企業等の協力も得ながら、各大学の特色を活かした科目を新設することができた。開講時間については、これまで月曜日の午後 3 コマを共同化授業の実施にあててきたが、月曜午前に拡大し、新たに上回生用科目を配置して、高度教養教育の充実へと展開することにした。また既存科目の見直しもはかって、三大学教員のリレー講義の充実もはかった。これらは大学間の協働関係が進んだゆえの成果である。新たな取組の具体的な内容については、後述の「平成 29 年度における新たな取組」と石田リベラルアーツセンター長の報告をご覧いただきたい。

最後に、本取組の理念構築において中心的な役割を果たしてきた林特任教授から寄せられた論考「共同化教養教育の課題と展望」に触れておきたい。林教授は戦後日本において進行した教養教育の形骸化に早くから警鐘を鳴らし、今一度「豊かな人間性・市民性の涵養」というリベラルアーツの原点に立ち返って、進路・専門分野に関わらず学生たちに幅広い学びと議論の場を提供することを提唱してきた。その理念は本取組が掲げる教育目標に具現化している。今後は三大学による共同化教養教育の取組が「京都モデル」として全国に波及するために、本機構が継続的に情報発信する必要性が強調されている。林報告の提言に耳を傾けながら次年度以降の展開を構想していきたい。

末尾になったが、ここで改めて本取組の推進に注力してこられた関係各位に感謝の意を表したい。今後は向かうべき方向性を確認し、未来の社会で能動的な生き方を実現できる三大学学生の育成に向けて、引き続き改善を図っていく所存である。

第１部

教養教育共同化の展開

（1）平成 28 年度共同化授業の概要

京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学の京都三大学による共同化授業が平成 26 年 4 月に始められ、今年度で 3 年目を迎える。

三大学での共同化教養教育は、個々には規模が小さく、各大学で提供できる科目に限りがあるため、各大学の強みと特徴を生かした教養科目を相互に提供し、提供されたすべての科目を各大学が自大学の科目とすることによって、学生の科目選択の幅を大きく増やし、学修意欲を高めようとするものである。

文系、理工系、医学系の専門分野や将来の志望が異なる三大学の学生が授業で混在し、多様な視点や価値観を持つ学生が一緒に学び交流することを通じ、豊かな人間性の形成に資することもねらいとしている。平成 26 年夏に、京都府立大学敷地内に教養教育共同化施設「稲盛記念会館」が整備され、後期授業からは学生が一堂に会し授業が実施されるようになったことは、学生間交流に大きな弾みとなったことは言うまでもない。

今年度の共同化授業は、三大学で共通の学年暦を定め、前期は 4 月 11 日（月）から 8 月 1 日（月）（試験日を含む）、後期は 10 月 3 日（月）から 2 月 6 日（月）（試験日を含む）の期間、前年度と同様に、毎週月曜日の午後 3 つの時限に開講することとした。また、これ以外に、夏期と冬期休業期間中に集中科目を開講した。

平成 28 年度共同化カリキュラムの概要

平成 28 年度は、共同化科目として、別表（16 ～ 17 ページ）のとおり講義方式 65 科目（人文系 23 科目、社会系 21 科目、自然系 21 科目）と、リベラルアーツ・ゼミナール 9 科目（人文系 2 科目、社会系 6 科目、自然系 1 科目）の 74 科目を開講した。京都工芸繊維大学と京都府立大学の提供科目の一部見直しにより、科目群間での科目数の変動はあったものの総科目数は昨年度と同様 74 科目とし、諸分野をバランス良く提供することに努めた。

この結果、共同化開始前に比べ学生の科目選択幅は、各大学により異なるものの、2.1 倍～ 4.9 倍に大きく拡大した。

74 科目のうち 12 科目は『京都学』科目である。三大学の教員によるリレー形式での授業を 1 科目開講しているほか、京都工芸繊維大学が 2 科目、京都府立大学が 7 科目、京都府立医科大学が 1 科目、機構が 1 科目担当することで、各大学の専門性を生かした多様な『京都学』科目を提供している。

また、学生同士が交流し、共通のテーマで対話し議論する力を育むことをねらいとした少人数での「リベラルアーツ・ゼミナール」を、昨年度同様 9 科目開講した。考え方や学び方の基礎力を培ったり、グローバルな視野を広げる集中講義によるゼミナールなど多彩な内容を提供している。

このほか、学び続ける教養教育の観点で、昨年度から取り組んでいる上回生対象の高度教養教育科目を昨年度同様 3 科目開講したほか、語学・異文化理解科目も引き続き 2 科目（「ラテン語」・「英語で京都」）開講した。更には、教養教育共同化施設に隣接する京都府立植物園で授業を行う「意外と知らない植物の世界」など、フィールドワークを取り入れた科目も 2 科目開講した。

74 科目を提供大学別に見ると、京都工芸繊維大学が 30 科目、京都府立大学が 21 科目、京都府立医科大学が 11 科目、機構が 12 科目となる。

（2）共同化授業の受講状況

履修登録の状況

平成 28 年度前期の共同化科目は 38 科目で、提供大学別内訳は、京都工芸繊維大学が 14 科目、京都府立大学が 12 科目、京都府立医科大学が 6 科目、機構が 6 科目（うち「リベラルアーツ・ゼミナールⅡ）」は、a、b として 2 回実施）である。また、38 科目中 6 科目は、夏期集中講義科目として開講した。

学生の履修登録の状況は、別表「三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 28 年度前期）」のとおりである。設定した定員総数が 4,971 人であり、履修登録者総数が 4,494 人であった。大学別では、京都工芸繊維大学が 2,177 人、京都府立大学が 1,797 人、京都府立医科大学が 520 人である。三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）は 1,818 人であり、履修登録者総数（機構提供科目履修者を除く）4,272 人に占める割合は 42.6%であった。

次に、後期の共同化科目は 37 科目で、提供大学別内訳は、京都工芸繊維大学が 16 科目、京都府立大学が 9 科目、京都府立医科大学が 5 科目、機構から 7 科目（前期と同内容の「リベラルアーツ・ゼミナールⅠ」を含む）である。また、37 科目中 1 科目は、冬期集中講義科目として開講した。

学生の履修登録の状況は、別表「三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 28 年度後期）」のとおりである。設定した定員総数が 4,111 人、履修登録者総数が 2,763 人であった。大学別では、京都工芸繊維大学が 1,298 人、京都府立大学が 1,346 人、京都府立医科大学が 119 人である。三大学学生の交流状況を示す自大学以外の科目を履修登録した学生（機構提供科目履修者を除く）は 1,123 人であり、履修登録者総数（機構提供科目履修者を除く）2,636 人に占める割合は 42.6%であった。

これらの結果、前期と後期を合わせた通年での履修者総数は 7,257 人で、前年度に比べ 620 人増加（+9.3%）した。また、事業開始年度である平成 26 年度に比べると、1,361 人、伸び率で 23.1%の増加をみた。

大学別では、京都工芸繊維大学が対前年度 418 人増加（+13.7%）。京都府立大学が 97 人増加（+3.2 %）。京都府立医科大学が 105 人増加（+19.7%）という結果であった。

また、各科目の履修者数を定員で割った科目履修率を見ると、履修率が 90%を超えた科目が 38 科目にのぼり、昨年度の 28 科目を大きく上まわる結果となった。

履修定員調整

教養教育共同化施設の整備に当たっては、大規模での授業を避けるため、教室規模が最大 200 人程度とされたこともあり、科目ごとに履修定員を設定の上、授業を実施している。そのため、各科目において大学ごとに定数の配分を行うこととなるが、配分に当たっては、原則として、科目定員の半数を科目提供大学が、残りの半数をその他 2 校で 1 年生の学年定員数に応じ配分することを基本とし、できる限り学生の希望に応じた履修が可能となるよう、定員調整に当たって工夫を行ってきた。

まず、平成 27 年度においては、各科目ごとに、1 大学あるいは 2 大学の登録希望者数が当初の配分定員を超過する場合は、余剰が生じた大学の定

員枠を超過した大学に融通し、その上で各大学の定員枠を確定することとした。これにより、学生の履修希望にできる限り応じた対応を図ることが可能となった。

しかしながら、この改善策だけでは十分とは言えず、希望枠最大の第５希望まで希望したにもかかわらず、すべての抽選に漏れてしまった学生が２大学で７人存在した。これは、定員再配分段階において、希望者が定員を超過した大学は、第１希望の定員超過分だけ余剰が生じた大学から融通されるようになっていたことから、超過した大学の学生で第２希望や第３希望でその科目を登録しようとしても、結果的には登録できないことによるものであった。

平成 28 年度においては、これを改善するため、教育 IR センターと機構事務局で協議し、昨年度と同様に再配分を行った上で、未だ定員を満たすことのなかった科目に対し、更に、その残余定員数を、大学ごとの各科目の総超過人数比で按分の上、再々配分することとした。

この結果、第５希望まで希望したにもかかわらず履修登録できなかった学生は、昨年度の７人から１人にまで減少し、改善の効果が認められた。

学生への受講ガイダンス等

共同化授業の内容について、受講する学生に対し分かりやすく周知を図る必要があるため、三大学共通のガイダンス冊子「京都三大学教養教育共同化科目受講案内」（資料編参照）を作成した。

冊子には、この１冊があればスムーズに共同化授業が受講できるよう、共同化の理念・目的をはじめ、共同化科目の履修方法、共同化科目一覧、前・後期ごとの各科目の履修定員、科目概要、開講時間割などを掲載した。科目概要には、科目の説明だけでなく、当該科目担当教員の授業に対する姿勢や思いを学生へのメッセージとして、授業目的区分とともに掲載した。

また、今年度は、共同化授業と同時に実施している三大学連携教養教育単位互換制度について、より一層の活用が図られるよう、冊子「単位互換履修ガイド」を新たに作成し、配布した。

学生への受講ガイダンスは、各大学で実施される新入生履修ガイダンス時に、共同化科目に関して説明する時間枠を設け、関連冊子の配布と説明を行った。

なお、今年度は、これまで京都府立医科大学看護学科の共同化科目履修状況が芳しくなかったことから、先輩学生からの説明をガイダンスに組み入れるなどの工夫を凝らした。その結果、今年度の看護学科の履修者は、前年度に比べ、前期で 1.4 倍、後期で 6.2 倍に大きく増加した。（その内容は、別項「リベラルアーツセンターの活動を総括して」に詳述しており、参照いただきたい。）

また、共同化科目の履修内容について、マンツーマンでのアドバイスを行うため、機構特任教員による「個別履修相談会」を、京都府立大学において実施し、10 名余の参加があった。

三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 28 年度前期）

提供大学	開講曜日	科　目　名	履修者数				交流率
			工繊大	府大	医大	合計	
工繊大	月３	日本近代精神史	56	33	1	90	37.8%
工繊大	月３	現代教育論	129	37	6	172	25.0%
工繊大	月３	生物学概論Ⅰ	47	40	4	91	48.4%
工繊大	月３	環境問題と持続可能な社会	59	28	11	98	39.8%
府大	月３	京都の歴史Ⅰ	102	170	25	297	42.8%
府大	月３	現代の政治	13	28	0	41	31.7%
府大	月３	現代京都論	77	102	25	204	50.0%
府大	月３	物理学Ⅰ	117	44	1	162	72.8%
医大	月３	医史学	14	8	98	120	18.3%
機構	月３	リベラルアーツ・ゼミナールⅡａ (現代社会に学ぶ問う力・書く力)	7	15	0	22	-
工繊大	月４	日本近現代文学	27	13	0	40	32.5%
工繊大	月４	美と芸術	132	38	4	174	24.1%
工繊大	月４	化学概論Ⅰ	52	13	1	66	21.2%
工繊大	月４	人と自然と数学α	97	7	2	106	8.5%
工繊大	月４	キャンパスヘルス概論	70	96	1	167	58.1%
府大	月４	京都の文学Ⅰ	19	75	1	95	21.1%
府大	月４	社会学Ⅰ	33	81	3	117	30.8%
府大	月４	食と健康の科学	142	46	7	195	76.4%
医大	月４	日本文学Ⅰ	18	23	5	46	89.1%
医大	月４	人文地理学Ⅰ	68	48	86	202	57.4%
医大	月４	生物学的人間学	14	25	63	102	38.2%
機構	月４	京都学事始－近代京都と三大学－	6	54	1	61	-
機構	月４	リベラルアーツ・ゼミナールⅠａ (感覚で探る問題解決の方法)	14	10	6	30	-
工繊大	月５	比較宗教学	129	42	3	174	25.9%
工繊大	月５	日本史	68	46	3	117	41.9%
工繊大	月５	西洋文学論	17	33	0	50	66.0%
工繊大	月５	心理学	150	36	8	194	22.7%
工繊大	月５	エネルギー科学	35	18	0	53	34.0%
府大	月５	アジアの歴史と文化	21	68	0	89	23.6%
府大	月５	現代社会とジェンダー	40	73	5	118	38.1%
府大	月５	食環境をめぐる国際社会と日本	32	44	3	79	44.3%
府大	月５	京都の自然と森林	70	98	5	173	43.4%
機構	月５	リベラルアーツ・ゼミナールⅡｂ (現代社会に学ぶ問う力・書く力)	7	9	3	19	-
府大	集中	生命科学講話	176	222	38	436	49.1%
医大	集中	発達心理学	64	38	72	174	58.6%
医大	集中	時間生物学特論 (※３回生以上（修士課程大学院生を含む))	17	2	11	30	63.3%
機構	集中	リベラルアーツ・ゼミナールⅥ (現代イスラーム世界の文化と社会)	11	13	6	30	-
機構	集中	リベラルアーツ・ゼミナールⅦ (感性の実践哲学)	16	10	4	30	-
機構	集中	リベラルアーツ・ゼミナールⅣ (現代社会と映画製作)	11	11	8	30	-
		合　　計	2177	1797	520	4494	42.6%

（注）交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

三大学教養教育共同化科目の履修登録者（平成 28 年度後期）

提供大学	開講曜日	科　目　名	履修者数				交流率
			工繊大	府大	医大	合計	
工繊大	月３	哲学	47	16	2	65	27.7%
工繊大	月３	東西文化交流史	83	36	2	121	31.4%
工繊大	月３	京の意匠	24	9	0	33	27.3%
工繊大	月３	政治学	4	21	2	27	85.2%
工繊大	月３	京の産業技術史	48	22	0	70	31.4%
工繊大	月３	生物学概論Ⅱ	48	40	3	91	47.3%
工繊大	月３	科学史	69	27	1	97	28.9%
府大	月３	京都の歴史Ⅱ	64	230	4	298	22.8%
府大	月３	国際政治	8	25	3	36	30.6%
医大	月３	文芸創作論	10	23	6	39	84.6%
機構	月３	リベラルアーツ・ゼミナールⅢ（社会科学の学び方）	3	3	0	6	-
機構	月３	意外と知らない植物の世界	19	19	12	50	-
機構	月３	リベラルアーツ・ゼミナールⅧ（製品の機能から科学を学ぶ）	11	9	1	21	-
工繊大	月４	科学と思想	25	7	0	32	21.9%
工繊大	月４	環境と法	9	10	0	19	52.6%
工繊大	月４	人と自然と数学β	69	7	0	76	9.2%
工繊大	月４	人と自然と物理学	10	3	0	13	23.1%
府大	月４	ヨーロッパの歴史と文化	31	70	0	101	30.7%
府大	月４	京都の文学Ⅱ	20	55	0	75	26.7%
府大	月４	社会学Ⅱ	37	82	1	120	31.7%
府大	月４	現代社会と心	68	121	3	192	37.0%
医大	月４	宗教と文化	17	24	2	43	95.3%
医大	月４	ラテン語	58	36	8	102	92.2%
医大	月４	日本文学Ⅱ	30	13	4	47	91.5%
医大	月４	人文地理学Ⅱ	89	22	49	160	69.4%
機構	月４	リベラルアーツ・ゼミナールⅠｂ（感覚で探る問題解決の方法）	7	9	0	16	-
工繊大	月５	西洋文化論	93	78	0	171	45.6%
工繊大	月５	経済学入門	34	22	0	56	39.3%
工繊大	月５	人権教育	4	26	1	31	87.1%
工繊大	月５	化学概論Ⅱ	14	12	0	26	46.2%
工繊大	月５	地球の科学	97	73	3	173	43.9%
府大	月５	生活と経済	34	60	2	96	37.5%
府大	月５	現代科学と倫理	19	12	0	31	61.3%
府大	月５	京都の農林業	84	111	0	195	43.1%
機構	月５	英語で京都（※３回生以上）	1	1	0	2	-
機構	月５	リベラルアーツ・ゼミナールⅨ（経営哲学）（※２回生以上）	0	2	0	2	-
機構	集中	リベラルアーツ・ゼミナールⅤ（アメリカと中国はいま）	10	10	10	30	-
		合　　計	1298	1346	119	2763	42.6%

（注）交流率：科目提供大学以外の大学の履修者数をその科目の全履修者数で割った値。

（3）学生による自主企画活動の展開

ア　リベラルアーツ・ゼミナールから生まれた新入生歓迎講演会
ー主体的な学びを引き出すビブリオバトルとオーサービジットー

京都三大学教養教育研究・推進機構　教育 IR センター　特任准教授
児玉　英明

Ⅰ　はじめに

2016 年 4 月 18 日（月）、履修登録が確定する第 2 回目の共同化授業の放課後に、学生による自主企画として「新入生歓迎講演会」が開催された。講師には内田樹（神戸女学院大学名誉教授）を招き「なぜいま民主主義が問われるのか？～若者に求められる批判的思考力～」というタイトルで、基調講演が行われた。

当日は学生実行委員の 3 名が進行を担当した。司会を渕上紫乃氏（公共政策学部 2 回生）が担当し、企画趣旨の説明を北野史也氏（公共政策学部 3 回生）、杉山東洋氏（文学部 2 回生）が担当した。当日の進行を担当してくれた 3 名は、リベラルアーツ・ゼミナール「現代社会に学ぶ問う力・書く力」「社会科学の学び方」で共に学んだ仲間である。

新入生歓迎講演会は、リベラルアーツ・ゼミナールの学びがきっかけとなっている。そこで共に学んだ学生を中心に、自主ゼミナールを開催し、新入生歓迎講演会の企画へとつなげていった。

講演会は、まず、学生実行委員の北野氏と杉山氏が、内田先生を知ることになったきっかけをプレゼンテーションすることから始まった。高校生の時に、内田先生のどの本を読んで、どのような記述に感銘を受けたのかを、具体的に紹介しながら、講師紹介を行った。北野氏は内田樹『先生はえらい』（ちくま新書、2005 年）を読んで印象に残っている記述を引用しながら感想を述べた。杉山氏も高校生の時に読んだ内田樹『下流思考ー学ばない子どもたち 働かない若者たちー』（講談社、2009 年）を取り上げて、内田先生の著作のどこに惹かれたのかを紹介した。

講師紹介の際に、形式的に講師の略歴を紹介するのではなく、「なぜ、その講師に講演を依頼したいと思ったのか」を、自己の読書経験をもとに語った。つまり、新入生歓迎講演会は、リベラルアーツ・ゼミナールの学びをきっかけにして、そこに「ビブリオバトル」と「オーサービジット」が加わることで、学生の主体的な学びへとつながったものである。

図 1　学生実行委員による企画趣旨と講師紹介

Ⅱ　講師との対話と参加者同士の対話

新入生歓迎講演会の企画は「最近読んだお勧めの本」を紹介し合うリベラルアーツ・ゼミナールのグループワークから発している。お勧めの本を紹介し合う中で、複数の学生から内田樹先生の名前が挙がったことが企画するきっかけとなった。

新入生歓迎講演会では基調講演の後に、グループワークを取り入れて、感想をしゃべり合う時間を設けた。各参加者が講師の話を拝聴するだけでなく、近くに座った者同士で、対話の時間をとった。このように、グループワークの後に、講師との質疑応答を行ったことで、より会場に一体感と活気が増したように感じられた。

内田先生が講演で投げかけた問いかけは「民主と独裁は対立するものではなく、民主から独裁が生まれることもあるのではないか？」というもの

である。民主主義には良い点と悪い点があり、「その悪い点とは何か？」「その悪い点を制御する方法はあるか？」といった問いかけである。

講演では、日米関係やアメリカ大統領選挙の動向に触れながら、日本では「カウンター（反対の）」立場への理解が乏しいことを指摘された。例えば、新入生歓迎会当時は、アメリカの民主党内で予備選挙が行われていたが、最有力候補のヒラリー・クリントンのカウンターとして、バニー・サンダースが若者の支持を集めていることを取り上げた。「サンダース旋風」のような現象は日本ではあまり見られない「カウンター」である。現在も、トランプ大統領の発言をきっかけにして日米関係に注目が集まっているわけだが、日米同盟という疑うことなく受け入れている現象を事例にして、内田先生は「属国」という概念を問い直す問題提起をされた。その後、「日本はアメリカの属国なのだろうか？」という論点についてグループワークで意見交換をしている学生も見られた。

図２　内田樹先生の基調講演

図３　2016 年度・新入生歓迎講演会プログラム

18:00 ～ 18:05	開会挨拶（学長）
18:05 ～ 18:15	学生による講師紹介（北野・杉山）
18:15 ～ 19:15	基調講演（内田樹先生）
19:15 ～ 19:20	休憩
19:20 ～ 19:40	グループワーク
19:40 ～ 20:25	質疑応答
20:25 ～ 20:30	閉会挨拶（杉山）

Ⅲ　学生の主体的な学びを引き出す工夫

(1) ビブリオバトル

ビブリオバトルとは、自分のお気に入りの本について熱を込めて紹介し、それを競い合う「知的書評合戦」である。

ビブリオバトルを試行した時に、熱のこもった発表をしてくれたのが、書店でのアルバイト経験もあり、後に新入生歓迎講演会の実行委員長をつとめてくれた北野氏だった。北野氏は、高校で読んだ『先生はえらい』を紹介してくれた。

受講生と話をしていると、リベラルアーツ・ゼミナールには、内田先生の愛読者が複数いることが判明し、北野氏に続いて杉山氏が『下流思考－学ばない子どもたち 働かない若者たち－』を紹介して呼応した。杉山氏に呼応して、著者が内田樹『憲法の「空語」を充たすために』（かもがわ出版、2014 年）を紹介した。このようにビブリオバトルが次々と連鎖する中で、内田先生を京都三大学教養教育研究・推進機構の講演会に呼ぶことができないかという話になった。内田先生は教養教育の目標である「民主主義理解」の中で、鋭い「批判的思考力」を発揮している代表的な論者であり、教養教育の講演者に適任だからだ。

図４　ビブリオバトルで登場した本

(2) オーサービジット

オーサービジットとは、本の作者（オーサー）が各地の学校の教室を訪れ、個性たっぷりの授業をすることである。子どもたちは、来て欲しいオーサーが決まったら、その思いを、一枚の色紙に注ぎ込んで送る。オーサーの気持ちを動かす決め手は色紙に込められた子どもたちの熱意である。

「ビブリオバトル」も「オーサービジット」も、初等・中等教育における読書活動を推進する取組として行われている。ビブリオバトルは読売新聞、オーサービジットは朝日新聞が力を入れている。

リベラルアーツ・ゼミナールでは、初等・中等教育の読書推進の実践を高等教育に取り入れ、ビブリオバトルをきっかけとしてオーサービジットにつなげていく構成を取った。

まずビブリオバトルで活躍した学生の北野氏と杉山氏が、課外で自主的な読書会を企画し、内田先生の著作について意見を交わした。教員からは次の二点を指示した。第一に、内田先生を読み手に想定し、『先生はえらい』と『下流志向』の感想文を書くこと。第二に、内田先生を読み手に想定し、新入生歓迎講演会の企画書を書くことである。

その後、学生自ら、感想文と企画書を仕上げ、内田先生が主宰する合気道の道場「凱風館」に連絡して訪問のお願いをした。

幸いなことに、内田先生は学生の企画を快諾してくれた。その後、企画委員の学生は、200 名収容の大教室を予約し、参加者を学外からも募るために、twitter を活用して積極的に広報した。また、手作りチラシを作成し、大学記者クラブや大学コンソーシアム京都でも広報を行った。その結果、新入生歓迎講演会には、高校生、奈良県の小学校教員、会社員の方など、三大学の学生以外もたくさん参加し、活気ある講演会となった。

図 5　学生実行委員と内田樹先生

Ⅳ　学生実行委員の感想

(1) 北野史也氏（公共政策学部 3 回生）

大学一年生の夏ごろに学生主体で作り上げる講演会を企画してみないかとのお声がけをいただいたことから始まり、大学 3 年生の今年 4 月 18 日に無事に内田樹氏の講演会を開催することができました。

開催するまでに約 2 年という長い年月がかかってしまいましたが、その分、企画や準備等をじっくりと練ることができました。

企画書の作成や、直接交渉に内田氏のもとへ訪れるなど、多くの貴重な体験と経験をすることができて大いに勉強になりました。

当日は多くの方が講演を聴きにこられ、内田氏は熱のこもった興味深いお話をして下さり、とても充実した講演会になったのではないかと思います。

会場の人どうしの意見交換や内田氏への質疑応答の様子を見て知のダイナミズムを感じずにはいられませんでした。

講演会に関わってくださった全ての方に感謝の意を抱くとともに、今回の経験を今後の学びに活かしたいと思います。

（2）杉山東洋氏（文学部２回生）

京都府立大学で先日行われた思想家、内田樹先生の講演会は、私にとってこの上なく知的欲求が刺激されるものであった。それは、内田先生の言葉に、私たち聴講者に彼の考えを伝えようという確固たる意志があったからだろう。

言葉とは、必ずしも発話者の真意を直接表現するものではない。また言葉で直に自身の持つものを表現することは少なからず責任を伴うものである。

言霊信仰など、日本には古くから言葉への畏敬の眼差しがあったが、発言媒体の氾濫する現代においては、発言者の多くは、発言の責任に耐えられずその心を閉ざすか、責任の存在を無視して堕落した言葉に安住している。だが内田先生の言葉は、ひたすらに力強く、また話す者、聴く者、そして言葉自体への敬意と愛があった。

言葉を蔑ろにする時代が来ているのかは分からない。しかし私は言葉への敬意、考えることへの敬意を忘れずこれからも自身の信じる道を模索したい。

V　おわりに
－心を動かされる本や映画に出会う経験－

今回の新入生歓迎講演会は、リベラルアーツ・ゼミナールにおけるテキスト（吉野源三郎『君たちはどう生きるか』）の精読の経験が大きい。吉野が次代の若者に期待したことは、民主主義理解と密接に絡み合った批判的思考力である。一冊のテキストを素材にして精読を行い、教員と学生が対話を重ねる経験は講義形式にはないゼミナール形式の授業の強みである。

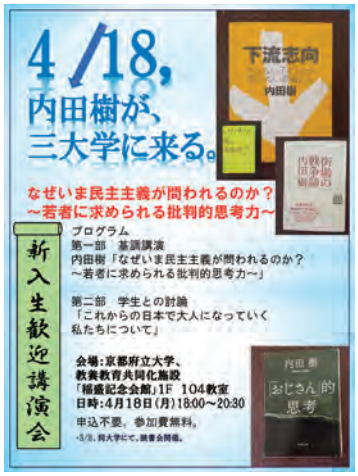
新入生歓迎講演会は、たまたまゼミで行ったビブリオバトルがきっかけである。その際に、内田先生の愛読者が多かったことから出発している。

ビブリオバトルの経験を、学生の主体的な学びに結びつけるのであれば、話題になっている新書や小説を精読し、議論を重ねる中で、「ぜひその本の著者を招いて直接に話を聞いたみたい」と思うような機会に遭遇するかどうか。話題になっている映画をゼミナールで鑑賞してディスカッションを行い、「ぜひその映画を製作した監督と意見交換がしたい」といった気持ちになるかどうか。

このような「本」や「映画」に巡り会うことは稀である。仮に巡り会ったならば、なぜそれに惹かれたのかを、自分に問い直して欲しい。教養教育を学ぶ二十歳の学生にとって大切なことは、常に自分の体験から出発して、正直に、自分の頭で考えていく姿勢をもつことだからだ。そのようなきっかけは、学生の主体的な学びを、確実に引き出しているという実感がある。

新入生歓迎講演会を企画してくれた学生は、書物を通じて内田樹を知り、そして内田先生と対等に語り合う機会に恵まれた。そこで感じた知的な興奮は、今後、教養教育を学び続ける原動力となるだろう。

図６　学生の手作りのチラシ　学生実行委員 杉山東洋（作）



イ　宿泊型研修

京都三大学教養教育研究・推進機構　リベラルアーツセンター長
京都府立大学　教授
石田　昭人

（1）趣旨と経緯

本共同化事業においては文科省への申請時点でリベラルアーツセンターの計画事業の一つとして、②先端的な教養教育の開発や「新しい時代の要請に応じたリベラルアーツ科目」、「学部・大学の垣根を超えた学際的科目」等の企画･実施（ア～ク）の中で、カ「京都の歴史的・地理的特性を生かした宿泊型研修の実施」があげられていた。この企画は学生主体の探求活動支援策の一つとして構想されていたものであったが、なかなか実現には至らなかった。一口に「京都の歴史的・地理的特性を生かす」と言っても、その位置づけの幅は非常に広く、計画次第で性格が全く異なるものになり得るうえに、下手をすると単なる名所旧跡巡りや伝統技能体験会の誹りを免れないものになってしまう恐れも多い。実施する以上は共同化教養教育の理念を体現したうえで参加者が十分満足できるようなものにしなければならないし、そのためには類似の先例の調査や候補案の十分な検討が必要であるため、毎年のように実施が先送りになってしまっていた。正直のところ非常に難しい案件であったが、いよいよ最終年度を迎え、否応無しに実施に向けて動いたわけである。

（2）研修の設計

まず、最も重要な位置づけであるが、日本の未来、次世代産業、高度情報化、ものづくり、超高齢化、地方の未来、農林業、限界集落、伝統産業、環境保全といったキーワードを念頭に、京都市内から京都府内全域に至る場所を想定し、どこで、どのような形態で研修が行えるかについて、それぞれの目的と期待される成果を考えた。その結果、綾部市が候補として浮かび上がってきた。綾部市は京都府内の中丹地域の中核的な工業都市の一つでありながら、同時に農林業に依存したいわゆる限界集落をいくつも抱える都市であり、都会の若者を積極的に受け入れて定住化を図る政策を予てから推進している。さらに、その豊富な森林資源は特産品の供給源としてだけではなく京都府の水源としても重要な役割を演じている。したがって、三大学に所属する多様な専門領域の学生達が京都府山間部の森林や伝統産業に触れ、貴重な資源としての価値を体感するとともに、急速な人口減と高齢化にともなうコミュニティー崩壊の危機にある限界集落地域で活動している団体や地域住民との交流を通して地域の抱える様々な課題を認識し、打開策を考えることで自分自身の将来とともに日本と地域の今後を展望することができよう。研修の場としてこれほど相応しい場所は他にはないように思われた。

そこで、具体的な研修計画を立案することにした。先述のように綾部市は都会の若者を積極的に受け入れており、このような研修をはじめとする説明の機会についても好意的に対応してくれることはわかっていた。また、府立大学の公共政策学部では綾部地区においてこれまで活動の実績があり、小沢副学長や杉岡准教授から色々なアドバイスを受けるとともに行政担当者を紹介していただくことができた。しかし、私自身を含めて機構に関係する教員には当然ながら現地での経験が全く無く、現地の人達との面識も無い。したがって、綾部の山間地域と若者を結ぶ活動についての具体的な経験と実績をもつ人物の支援を仰ぐことは研修の効果を高める上で不可欠と考えられた。そこで、都会の若者と地方都市の山間部を結ぶ「まち冒険」や「コミュニティーナース」といったプロ

ジェクト活動を実施して大きな成果をあげてきた株式会社ボノの取締役である谷津孝啓氏とインターンシップ生である竹中那月氏をアドバイザとして招き、学生達のワークショップとフィールドワークを支援してもらうことにした。谷津氏は綾部市における活動の経験と実績があるだけでなく、行政担当者や地区住民と親交がある。また、竹中氏は京都大学法学部３回生で、学生達と年齢が近いことからワークショップやレポート作成の支援に最適と考えられた。谷津氏のアドバイスをもとに、２日間の研修を設計し、具体的な計画と行程表を作成した。

（3）実施内容

・実施日時
　平成 28 年 9 月 15 日（木）～ 16 日（金）
・実施場所
　京都府綾部市上林地区、古屋地区、鍛冶屋地区、およびグンゼ博物館
・宿泊場所
　綾部市里山交流研修センター
・参加者
　3 大学学生 17 名
・引率
　石田昭人
・指導支援者
　株式会社ボノ取締役谷津孝啓様
　同インターン生竹中那月様
・現地協力者
　綾部市定住交流部水源の里・地域振興課課長朝子直樹様、定住促進課課長補佐大槻康彦様、水源の里・地域振興課集落支援員水谷太一様、株式会社緑土代表取締役社長永井晃様、特定非営利法人里山ねっと・あやべ代表朝倉聡様、水源の里・古屋地区自治会長渡邊和重様、黒谷和紙協同組合専務山城睦子様、里山ゲストハウスクチュールオーナー工忠照幸様ご夫妻、民泊活動推進者芝原キヌ枝様

（4）プログラム

1 日目

①古屋地区訪問と栃の実拾い体験

15 日午前 9 時に府立大学をバスで出発し、車中自己紹介を行った。まず、綾部市上林地区の最奥部に位置する古屋地区を訪れ、地区の代表である渡邊氏、朝子課長、水谷集落支援員から現況説明を受けた後、栃の森に入って約 2 時間にわたって栃の実拾いを行った。

一同は栃の森のあまりの美しさに圧倒され、夢

中になって栃の実を探し集めた。時間の関係で大きな収穫が期待される最奥部にまでは到達できなかったが、合計で数キログラムの栃の実を拾うとともに、森の中で渡邊氏、朝子課長、水谷集落支援員から色々な話を伺うことができた。

また、源流として湧き出す水を飲み、水源の里という意味を実感した。予定時間を過ぎても学生達はなかなか帰ろうとはしなかったが、私もまた同じ気持ちであった。

一同、後ろ髪を引かれる思いで古屋地区に戻って再び渡邊氏や３名の住民の方々と語り合った。「自分達の代で古屋を廃村にしたくない。もっと若ければ、もっと人がいれば、といったできない理由探しは止めて前向きに集落振興に取り組もうと思ったんです。そうやって必死で頑張ってたらだんだんと助けてくれる人が集まってきたんです。」、「生きている限り、人は誰かの役に立っていることを実感したいんですよ。だから、なんとかやっていきたいんです。」渡邊氏が涙ながらに語る熱い言葉の重みは学生達の心に強く響いたようであった。その後、栃の実ぜんざいを食べ、再会を誓って記念撮影を行い、住民の方々に見送ら

れ、互いに見えなくなるまで手を振り続けて上林地区の中心部に戻った。この古屋地区には全国から多数のボランティアが繰り返し訪れるという理由が心底から納得できる、学生達にとってはまさしくかけがえのない体験であった。

②黒谷和紙作製体験

上林地区にある黒谷和紙会館を訪れ、2 グループに分かれて和紙会館の見学とともに作製を体験した。和紙会館の見学は黒谷和紙協同組合専務の山城氏の案内で行い、伝統特産品である黒谷和紙について、その材料と制作過程を学ぶとともに、特徴を活かした一連の製品の紹介を受けた。また、本格的な作者を目指す研修生の練習風景も見学することができた。学生達からは和紙の特徴、製作のコスト、製作者の生活基盤、販路の拡大法などについて活発な質問があった。

一方、作製体験は指導員によって行われ、一人一人が各自のデザインしたはがきを数枚ずつ作製した。初めての体験であったが、予想していたよりは簡単に製作できて楽しいひとときであった。出来上がったはがきは後日送付してもらったが、思いの外丈夫で美しい仕上がりに黒谷和紙のポテンシャルを実感できたようである。

③ワークショップ

宿舎である里山交流研修センターに到着し、夕食後、株式会社ボノ取締役谷津氏およびインターン生竹中氏の指導でワークショップを開催した。グループに分かれてグループ内で議論を行ったうえで一人一人が提案発表を行った。

私が三大学の学生達の実力と可能性を最も実感できたのはこのワークショップである。今朝までは互いに全く面識すらなかった学生達がここまで

打ち解けつつ、真摯に、有益な議論が出来るとは正直思っていなかった。栃の森や和紙作りの体験によって、学生達が自分自身にとっての研修の意味をうっすらと見出すことができ始めていたところに、互いの意見を交換し、摺り合わせることで、それがより明確化されたのではないかと思われる。

発表はそれぞれ独自の着眼と考察に基づく興味深いもので、和紙を使ったライトアップによる雪祭りを行うといった実現可能性のある提案もあり、学生達の着眼の独自性と発想力の高さを感じさせられた。

このワークショップが成功したのは、指導に当たっていただいた谷津氏と竹中氏の御尽力の賜であった。常に学生達の主体的な動きをさりげなく支える、実に洗練された指導と支援であった。なお、この研修中、学生達はそれぞれ自分の感覚に基づいて、できるだけ多数の写真を撮影しておくように谷津氏からあらかじめ指導を受けており、それは後述するレポートによく反映されていた。

ワークショップ終了後は部屋に分かれて深夜まで親交を深めた。

2日目

④民泊活動と廃屋活用の調査

調査地である鍛冶屋地区へのバス中、元綾部市職員で現株式会社緑土代表取締役社長の永井氏から、綾部市がこれまで取ってきた定住策の趣旨や実績についての解説を受けた。鍛冶屋に到着後、公民館において定住促進課課長補佐の大槻氏から綾部市の定住策についての概況説明を受けた後、民泊活動をこれまで推進してこられた芝原氏と里山ゲストハウスクチュールオーナー工忠氏ご夫妻をそれぞれ交え、民泊活動の意義や経緯についての聞き取り調査と議論を行った。芝原氏は60歳を過ぎてようやく自分一人で自由な時間を過ごせるようになったのを機に、それまで国内でもほとんど実績のなかった民泊活動を開始された方である。高齢の女性がたった一人で前例の無い活動に取組み、色々な制度上の困難を行政と交渉しつつ解決し、軌道に乗せていった姿に学生達は大きな

感銘を受けた様子であった。芝原氏の挑戦を間接的に支えた綾部市の柔軟な対応も印象的であった。一方、工忠ご夫妻は若いご夫婦であるが、夫の工忠氏は世界各国を渡り歩いた経験の後、この綾部で民泊活動を開始されたという。若い世代を受け入れている綾部市であるが、良いことだけではなくかなりのご苦労もあるわけで、それをどう乗り越えるかが今後の地方の活性化の鍵でもあろう。学生達は活発に質問を繰り返し、ご夫妻の返答に真剣に聞き入っていた。

議論の後、工忠氏と大槻氏の案内で廃屋の活用に向けた取組の見学に訪れた。工忠氏がゲストハウスとして改造工事を施された家屋や買い手募集中の大きな古民家を巡りながら説明を受け、学生達はそれぞれ活用策や課題を考えることができたようであった。

⑤グンゼ記念館見学

綾部温泉にて昼食後、綾部市の中心部にあるグンゼ記念館を訪れた。談話室で今回の宿泊研修の総括とレポート作成の手順の説明を谷津氏に行ってもらった後、記念館を見学した。身近な衣料品メーカーであるから名前は知っていても会社の歴史と地域とのつながりについては私自身も知識はなく、創業以来社員を大切にして社員教育に大きな力を注いできた会社の基本方針には感銘を受けた。見学後、特産品販売コーナーで栃の実せんべいを納品に来られた古屋地区代表の渡邉氏と偶然再会することになり、同氏も学生達も大喜びであった。その後、バスにて府立大に帰り、研修の日程を終了した。

⑥レポートとアンケート

谷津氏がこれまで全国各地で実施してきた「まち冒険プロジェクト」で使用している「まち冒険レポート」というフォームをもとに学生達はそれぞれレポートを提出した。いずれ劣らぬ内容で、一つとして類似したものはなく、学生達がそれぞれ独自の視点で研修中体験した多くのことから課題を見つけて分析し、考察を深めたことが窺えた。アンケートでは極めて高い満足度が窺え、予想通り栃の森の圧倒的な存在感と、非常に困難な状況に立ち向かいながらそれを守り続けようとする渡邉氏をはじめとする地域の人達やそれを支える行政担当者の真摯な姿が学生達の心に強く響いたことが窺われた。

以上が念願であった宿泊研修の報告である。学生達だけではなく、私自身にとってもかけがえのない体験であった。苦労して研修を設計し、実施した甲斐があったと思う。できれば、これ１回に終わらさず、次につなげていってほしいと思う。

今後に向けての反省および検討課題としては、今回お世話になった谷津氏のような現地に詳しいコーディネータが不可欠であることから今後どのようにするか、参加人数は今回のような 20 人程度が最も有効かつ限度と思われるが希望者が増えてきた場合にどうするか、企画立案には相当な時間と労力が必要となるが今後どうするか、引率教員には相当な負担がかかるとともに学生の指導などについてかなりの力量が求められるため輪番制にするようなことは困難と思われるが今後どうするか、といったことがあげられよう。

最後に、本研修が成功したのは株式会社ボノの谷津氏の全面的な協力と支援があったからに他ならない。さらに、綾部市定住促進部の皆さん、山城氏、永井氏、工藤氏はそれぞれの業務で大変お忙しい中を熱心にご対応いただいた。地域住民の方々とともに、これらの方々の暖かいご理解とご協力に深く感謝する次第である。

（4）京都三大学教養教育共同化フォーラム「今、求められる教養教育　－京都からの発信－」報告

京都三大学教養教育研究・推進機構　リベラルアーツセンター　特任准教授
藤井　陽奈子

平成 28 年 11 月 19 日（土）13 時 30 分より、稲盛記念会館 1 階 104 教室にて開催された、京都三大学教養教育共同化フォーラム「今、求められる教養教育－京都からの発信－」について報告する。

フォーラム風景

三大学（京都工芸繊維大学・京都府立大学・京都府立医科大学）教養教育共同化の構想は、平成 18 年にさかのぼり、三大学の連携に関する包括協定の締結に始まる。平成 24 年度には文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」に採択され準備を経て、平成 26 年度より三大学教養教育共同化科目は開講した。採択から 5 年が経ち、本年度平成 28 年度をもって文部科学省の事業としては区切りを迎える。その総括としての本フォーラムは、現在までの軌跡と成果を教員と学生から発表することで、来年度より新体制で継続する三大学共同化教養教育ための省察と展望を共有する場になった。参加者は、三大学の教職員と学生の他、他大学や高等学校の教職員と一般府民である。当日の司会進行は藤井が行った。

はじめに、京都三大学合同交響楽団の 4 名によるクラリネット四重奏がオープニングを飾った。曲目は、「トリッチ・トラッチ・ポルカ」と「ヴァイオリンソナタ HWV372 よりアダージョとアレグロ」。

開会挨拶には、京都府立大学・築山崇学長が立った。続いて、文部科学省高等教育局大学振興課・大学改革推進室長の井上睦子氏から頂戴したメッセージを披露した。

それでは、プログラムを追っていくことにする。本フォーラムの詳しい内容は、本報告書別ページに「資料編」として掲載されている。この報告では、概要を記す。

基調報告 1「教養教育共同化－何をめざすか」

京都三大学教養教育研究・推進機構、リベラルアーツセンター長である京都府立大学の石田昭人教授が報告した。

はじめに、学生たちが自ら育つ力が湧き上がり、夢を見て、挑戦し、実現させる底力を身につけるエネルギーを三大学の共同化事業において与える大切さを語った。底力とは教養。底力を身につけられる新しい教養教育を目指すことを強調した。

そして、平成 24 年度からの経緯を示した。理念を策定し科目のデザインをしたこと、大学の規模に応じて科目を提供したこと、共同化科目の看板になるような代表的な科目の「リベラルアーツ・ゼミナール」と「京都学」をつくり、現在までに拡充と進化させたことを説明した。

特に、カレンダー、時間割、科目の登録方法、試験と成績の評価を三大学で合わせた苦労とその実現による達成感を表した。また、教養教育共同化施設「稲盛記念会館」が完成し、三大学の学生たちが一堂に会して共同化科目を受講することができる建物の重要性についても語った。

こうして、最初は理念を構築するところにエネルギーを注いでいたが、科目の定員や抽選の改善等からしだいに学生主体の方へシフトしていった。

具体的な学生主体の事例と成果として、2015年11月8日開催の学生シンポジウム「人・サル・植物の関係から知の源流と未来を探る」と2016年9月15-16日の宿泊研修における三大学の学生の生き生きとした活動を挙げ、写真を見せた。

これで、本事業の目標として掲げたことは教職員や関係者の努力の末、全て成し遂げてきた。だが、改めて何を目指すのか、もう一度理念を議論すべきだと石田教授は投げかけた。その際、私たち教員が教養というものの重要性を再認識する必要があるのではないかと。そのためには教員が興味を持って取り組めるような教養教育として、その理念をもう一度探す必要があるという。そうしたエネルギーを、教員は様々な可能性を秘めた学生たちに与える責任があるのだと最後に強調して報告を終えた。

基調報告２
「教養教育共同化－質保証をめぐって」

京都三大学教養教育研究・推進機構、教育IRセンター長である京都工芸繊維大学の大倉弘之教授が報告した。

質保証とは何かということから出発し、日本社会における教育の質保証の経緯を述べ、大学が提供する教育の質保証の観点からこれまでの三大学教養教育共同化の歴史を振り返った。

そのうえで、本事業を主に運営する京都三大学教養教育研究・推進機構として教養教育の質保証をどのように考えるのかについて具体的に示した。まず、本機構の構成、及び本機構と京都府、外部評価機関などの連携システムを質保証の仕組みと捉え、三大学の学生が一堂に学ぶ教養教育共同化施設「稲盛記念会館」の建物の存在と施設設備、三大学の学年暦の統一も質保証であるとした。

さらに、具体的な取り組みとしては、履修状況の調査。三大学の学生がどう受けているのか、交流率や科目定員のための抽選の問題などを調査し改善したことで、履修者数の増加を示した。

次に、教養教育の、教養教育共同化科目の中身を含めた質保証について考え続けてきた具体的な取り組みを挙げた。公開研究会、学生が授業を評価する授業アンケートやウェブでの１年次生アンケートと各教員へのフィードバック、学生の履修相談、教員同士で科目の在り方や質を考える教養教育共同化科目の担当者会議等を挙げ、その意義を述べた。

特に、大倉教授が数学という自然科学分野の担当であるということもあり、理系の学生が文系の科目を取る、逆に文系の学生が理系の科目を取るときの様々な問題等を担当者会議で意見交換できたことを取り上げた。

また、他の質保証の具体的な取り組みとして、教員によるアンケートや科目改善を記録するティーチング・ポートフォリオがある。教員アンケートでは、成績評価に関する具体的な工夫を記述してもらい、他の教員に配布し共有しているとした。

質保証への思いとして、ジェネリックスキルのようなものをいかに効率よく学ぶかというような数値的に捉えて評価することに特化せず、質保証という在り方を常に問い続けなければならないことを強調した。

結びに、本機構の取り組みというのは、全体が質保証の取り組みになっているのだということで締めくくった。

学生プレゼンテーション

三大学学生による７つの発表について概要を記す。三大学教養教育共同化科目の講義を紹介し、講義を通して何をどのように学び、何ができるようになったのか、どのような自主的な活動ができたのか等を発表した。

1. 人間と自然科目群
「意外と知らない植物の世界」

（京都工芸繊維大学１回生･野﨑、野口、和田）

京都府立植物園におけるフィールドワークを中心としたリレー講義である。植物の生き抜く戦略、薬効成分のある植物や熱帯植物の観察、植物園でできる教育活動の探究を主に説明した。

フィールドワークの写真を見せながら、観察した植物を具体的に挙げた。中でも、映画「スターウォーズ」のダース・ベイダーに似ていて有名な珍しい花の様子と生態は興味深かった。

この講義を通して、協調性と表現力が向上したことや五感で感じる学習の重要性を唱えた上で、通年開講やフィールドワークにおける教材等を提案した。さらに、教養教育におけるコミュニケーション能力や主体的行動力の育成の必要性を述べた。またこの講義では、文学における植物の捉え方や表現を学ぶ講義も含まれ、かつ文系理系の学生が交流して学んでいることから、文理融合による多角的な視点とその共有の重要性を強調した。

植物園を利用した「意外と知らない植物の世界」

2. 人間と文化科目群　京都学「京都の歴史Ⅰ」

（京都府立大学１回生・岡村、京都府立医科大学１回生・菅原）

この講義では、京都の原始時代から中世までの文化や災害、地理的な歴史を学び、いまの京都がどのように形成されてきたかを考える。３名の教員によるリレー講義で、受講生が非常に多く人気がある。

具体的な講義内容の一部を示しながら、発表者は京都で育ち学んできたが、知らないことの多さに気づき多くを学べたという。京都という地域で学んでいるので自然と興味を持ち、京都にある場所へ直接赴くことができたので、より関心が高まったそうだ。この講義を通じて、知識の獲得だけでなく好奇心や自発性を育めたと結んだ。

京都学「京都の歴史Ⅰ」で学んだ京都

3. 人間と社会科目群　京都学「医史学」

（京都府立医科大学３回生・坂田）

医大生が多い人気の講義であり、京都における医療の歴史を系統的に学ぶ。また、医療技術や制度、手法等について思想的背景を含めて学ぶ。さ

らに、どのように疾病を対処してきたかの歴史を、古代医療、中世医療、近世医療、近代医療の時代ごとに学ぶことによって文化としての医の本質を知ることが目標になっている。

具体的な講義内容とその工夫の一部を提示しながら、この講義を通じて、医学が純粋な自然科学というだけでなく、人と向き合って発達してきた学問であるのを感じたと述べた。加えて、現代の医療は多くの人々の功績の上に成り立っており、現代の先進医療を享受できるのは先人たちの努力のおかげであることを実感したそうだ。

おわりに、医大生、府立大生と工繊大生それぞれにとっての教養教育で医史学を学ぶ意義を述べて締めくくった。

京都学「医史学」で三大学の学生は何を学ぶのか

4. リベラルアーツ・ゼミナールⅠ「感覚で探る問題解決の方法」

（京都府立大学３回生・神田、清瀧）

このゼミナールでは、具体的な日常における身近な問題について、その原因と解決策を導き出すことを目的としている。このゼミナールの内容を示した上で、特徴として、ゼミナール形式による学生主体の学び、三大学学生の交流、文系理系の異分野混合で受講すること、自身の問題について取り組むので個性が出せることを挙げた。

特に、このゼミナールを通じて、異なる価値観を持った者同士が交流することの意義を述べ、問題発見と分析、自身の感覚を持ちながら他者と討議し論理的に解決する方法を学んだという。また、自ら発表し他者の発表を聴くことで表現の仕方を学んだと語った。さらに、このゼミナールへの改善策を具体的に提案した。

最後に、教養教育への提言として、このゼミナールで養った能力や姿勢を通じて改めてゼミ形式による講義の必要性を唱えた。「ゼミ形式を増やして！」という希望を掲げたプレゼンテーションの大画面がインパクトを添えた。

リベラルアーツ・ゼミナールⅠ「感覚で探る問題解決の方法」より「ゼミ形式を増やして！」

5. 学生シンポジウム「人・サル・植物の関係から知の源流と未来を探る」

（京都工芸繊維大学３回生・伊藤）

2015 年 11 月 8 日に稲盛記念会館で開催された学生シンポジウムについて報告した。

このシンポジウムでは、三大学の学生 20 名が混合し、人、サル、植物の関係に注目しながら、知とは何かについて課外自主活動を通じて探究したことをチーム（班）ごとに発表した。そして、ゲストコメンテーターとして京都大学総長の山極壽一先生と京都府立大学客員教授・京都府立植物園名誉園

長の松谷茂先生をお招きしディスカッションした。

三大学学生の混在する４つの班（A から D 班）がそれぞれテーマを設定し、そのテーマに沿った課題をどのように解決したのかを提示した。その際、フィールドワークやインタビュー等を含めた調査について、主に発表者所属の D 班の活動と内容を語った。その D 班は、比叡山における人と動植物の関係性を通じてアフリカのヴィルンガ山地の未来を予想し、具体的な解決策を考えた。

そうした調査過程でのインタビューや現地でのエピソードを踏まえ、直接見て聴く、現地に足を運んで知り学ぶことの重要性について語った。

また、この自主的な活動を通じて、コミュニケーション能力や問題解決能力を育成する機会に恵まれたこと、そうした機会が学生には必要だということを痛切に感じたと述べた。学生の自主的な活動につながる、参加型の講義や教育活動の必要性を改めて強調し発表を終えた。

2015 年 11 月 8 日の学生シンポジウムについて

6. 学生による新入生歓迎会「なぜいま民主主義が問われるのか？～若者に求められる批判的思考力」

（京都府立大学２回生・杉山）

2016 年 4 月 18 日に開催された新入生歓迎講演会の報告である。講演者は、発表者を含む２名が以前から敬意を表し、自主的に準備を重ね待ち望んでいた著名な内田樹氏である。内田樹氏は、フランス思想とアメリカ思想の専門家でありながら合気道の武道家でもある。講演の後、内田樹氏へ質問をしながら参加者を交えて討論した。参加者は、三大学の学生や教職員だけでなく多くの一般府民である。

特に、内田樹氏をお招きするまでの苦労や達成感、当日の講演会の模様を話しながら、自主的に企画した本講演会に関わる経験の意義を語った。

おわりに、発表者自身の思いとして、教養教育の重要性と感謝を述べた。

学生による新入生歓迎講演会と教養教育への思い

7. 綾部市での宿泊研修

（京都府立大学２回生・金子）

2016 年 9 月 15 日から 16 日に実施された京都府綾部市における三大学学生合同の宿泊研修について報告した。美しい自然に囲まれた綾部市の限界集落における研修２日間の具体的な工程を説明した上で、特に感慨深い集落の代表者の話について語った。どのように村興しができたのか、それまでの経緯を詳細に述べた後で、発表者自身が感じた「可能性を信じること」の大切さを熱く語った。

こうした研修の経験を踏まえ、今後も研修を継

続するための提案として、三大学学生の交流の活発化及び学生の主体的な創造の必要性を挙げた。

綾部市における宿泊研修の成果と展望

講評

本事業は、三大学教養教育運営協議会において外部評価を頂いている。その運営協議会専門委員である同志社大学の圓月勝博副学長より頂戴した講評の概要を記す。

まず、この教養教育共同化の特色は、三つに要約できると述べた。一つ目の特色は、京都を代表する個性ある三大学が連携しているだけでなく、国立大学と公立大学という設置形態が違う大学が連携している、なおかつ京都府立医科大学がこの連携事業に積極的に参画し、成果を着実に積み重ねていることである。医科大学特有の緻密なカリキュラムと学年暦の違いを克服した関係者の並々ならぬ努力があったと高く評価して頂いた。

二つ目の特色は、京都の特長である教育と文化を生かした教育プログラムであるとした。

三つ目の特色は、カリキュラムのバランスが質量ともにとてもよいことである。「人間と文化」「人間と社会」「人間と自然」の各科目群にそれぞれ20科目以上がバランスよく設置され、特定の分野に偏らず幅広く学び、汎用的な学力を育成することを目的とする教育になっている。特に、「人間」を常に中心に据えて人間力の育成を忘れないところに本事業の見識が示されているとした。また、「文理融合」やマスプロ教育でない「リベラルアーツ・ゼミナール」に今後も注目されているとのことだ。さらに、京都三大学の連携ならではの個性的な科目「京都学」について。教養教育の教材の宝庫である京都の文化を活用し科目を実現している。それが学生にもよく伝わっていることを、本フォーラムにおける前プログラムの学生プレゼンテーションで確信したと語った。

次に、このような三つの特色を持つ事業の成果を三点挙げた。一つ目の成果は、「異文化交流としての大学連携」が着実に推進されていること。使命も設置形態も異なった大学が連携していること自体が異文化交流のモデルとなっている。このような異なる分野の学生と学ぶ同世代の異文化交流が新たな学問や知を生み出していくことを期待していると述べた。

二つ目の成果は、「地域に密着したグローバル文化」の探求であるとした。英語が上達するだけでなく、その英語を使って語る内容をしっかり修得することはそれ以上に大事なことである。世界の文化都市である京都という地域に密着した学びの場で、世界に発信するべき内容を学ぶということが本事業では明快に意識されていると語った。そして、京都から世界に羽ばたく若者を育成してほしいと強い希望を述べた。

三つ目の成果は、「学生の主体的な学びの促進」が実現されている点である。先にプレゼンテーションした7組の学生の発表を例に挙げた。特に、正課授業だけではなく、非正課の自主的な活動にまで、その波及効果が及んでいることを指摘した。

続いて、本事業における今後の課題を3つ挙

げた。一つ目の課題は、教養教育の学修成果をどのように測定し、発信していくかという問題である。そのような研究も続け、教養教育の説明能力を高め国民や府民に対する説明責任を果たす努力を続けてほしいと述べた。

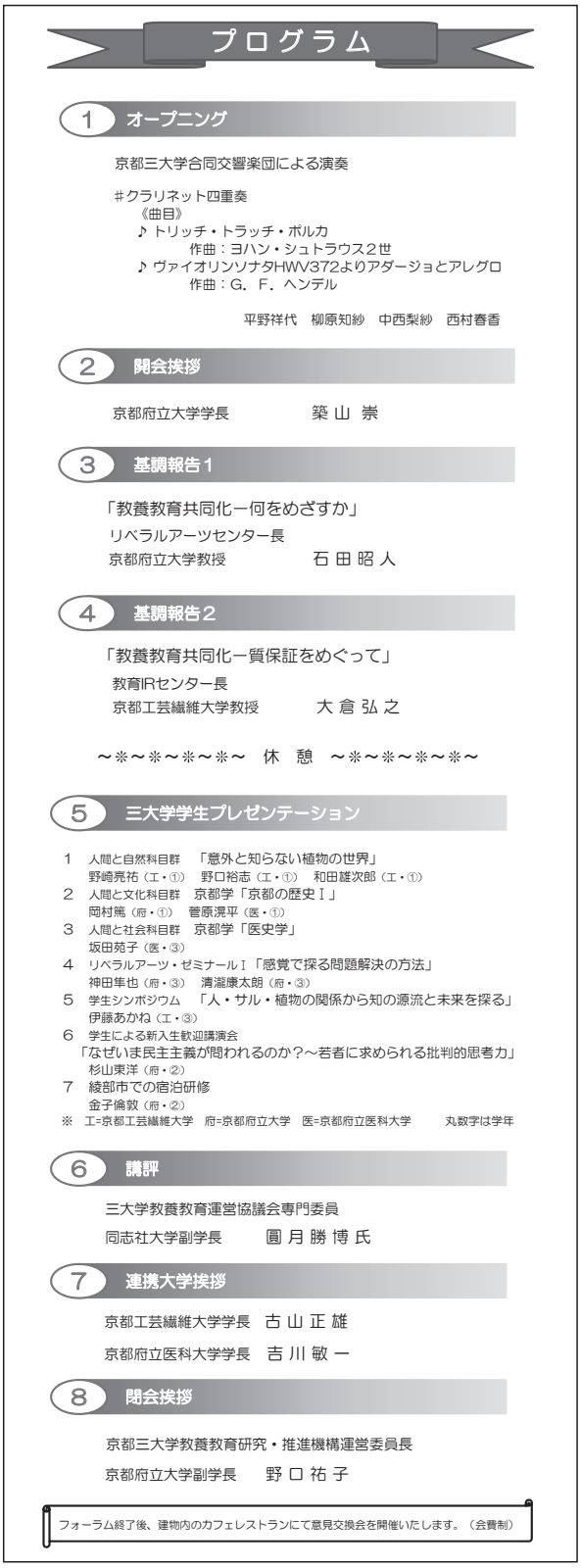
二つ目の課題は、教養教育とアクティブ・ラーニングの方法論化を推進することであるとした。マスプロ教育では期待できない、特に三大学共同化科目「リベラルアーツ・ゼミナール」で成果を挙げていることを発信できるように努めてほしいとのこと。また、能動的な学習を行う中で、「知識・技能」の修得についても常に注視する必要性を強調した。

三つ目の課題は、京都の教養教育の拠点化と他大学との連携拡大であるとした。京都には学ぶべきことが多くあり、学生時代にそれらを学ぶことのすばらしさを語った。加えて、三大学が京都の教養教育のリーダーとして、京都の他大学とも連携を拡大してほしいという希望と期待を込めて締めくくった。

本フォーラムは終盤に差し掛かり、連携大学挨拶として、京都工芸繊維大学の古山正雄学長と京都府立医科大学の渡邊能行副学長よりご挨拶を頂いた。そして、本事業・運営委員長である京都府立大学副学長の野口祐子教授の閉会挨拶をもって幕を閉じた。

最後に、本フォーラムの開催にあたり、尽力頂いた三大学教職員と関係者の皆様、プレゼンテーションの学生の皆様に厚く御礼申し上げる。

重ねて、本フォーラムを開催できるまでに至った三大学の本事業を５年間支えて頂いた多くの関係者の皆様方に心より感謝申し上げる。



プログラム

1 オープニング

京都三大学合同交響楽団による演奏

♯クラリネット四重奏
《曲目》
♪ トリッチ・トラッチ・ポルカ
作曲：ヨハン・シュトラウス２世
♪ ヴァイオリンソナタHWV372よりアダージョとアレグロ
作曲：G．F．ヘンデル

平野祥代　柳原知紗　中西梨紗　西村春香

2 開会挨拶

京都府立大学学長　築山 崇

3 基調報告１

「教養教育共同化ー何をめざすか」
リベラルアーツセンター長
京都府立大学教授　石田昭人

4 基調報告２

「教養教育共同化ー質保証をめぐって」
教育IRセンター長
京都工芸繊維大学教授　大倉弘之

～※～※～※～※～　休　憩　～※～※～※～※～

5 三大学学生プレゼンテーション

1　人間と自然科目群　「意外と知らない植物の世界」
野崎亮祐（工・①）　野口裕志（工・①）　和田雄次郎（工・①）
2　人間と文化科目群　京都学「京都の歴史Ⅰ」
岡村篤（府・①）　菅原滉平（医・①）
3　人間と社会科目群　京都学「医史学」
坂田苑子（医・③）
4　リベラルアーツ・ゼミナールⅠ「感覚で探る問題解決の方法」
神田隼也（府・③）　清瀧康太朗（府・③）
5　学生シンポジウム　「人・サル・植物の関係から知の源流と未来を探る」
伊藤あかね（工・③）
6　学生による新入生歓迎講演会
「なぜいま民主主義が問われるのか？～若者に求められる批判的思考力」
杉山東洋（府・②）
7　綾部市での宿泊研修
金子倫敦（府・②）
※　工=京都工芸繊維大学　府=京都府立大学　医=京都府立医科大学　丸数字は学年

6 講評

三大学教養教育運営協議会専門委員
同志社大学副学長　圓月勝博氏

7 連携大学挨拶

京都工芸繊維大学学長　古山正雄
京都府立医科大学学長　吉川敏一

8 閉会挨拶

京都三大学教養教育研究・推進機構運営委員長
京都府立大学副学長　野口祐子

フォーラム終了後、建物内のカフェレストランにて意見交換会を開催いたします。（会費制）

文部科学省「大学間連携共同教育推進事業」

京都三大学教養教育共同化フォーラム

「今、求められる教養教育 ―京都からの発信―」

日　時

平成28年11月19日（土）13:30～16:45

会　場

教養教育共同化施設
「稲盛記念会館」1階　104講義室
（京都市左京区下鴨半木町1番5　京都府立大学下鴨キャンパス内）

内　容

◆京都三大学合同交響楽団による演奏
◆基調報告1「教養教育共同化―何をめざすか」
リベラルアーツセンター長・京都府立大学教授　石田昭人
◆基調報告2「教養教育共同化―質保証をめぐって」
教育IRセンター長・京都工芸繊維大学教授　大倉弘之
◆三大学学生プレゼンテーション
共同化教養教育の授業や自主企画によるシンポジウム・講演会・合宿研修を通して学んだこと、その結果、学びへの姿勢がどう変わったかについて発表します。
◆講　評
三大学教養教育運営協議会専門委員・同志社大学副学長　圓月勝博氏

フォーラム終了後、建物内のカフェレストランにて意見交換会の開催を予定しています。（会費制）

参加費

無料　※出来るだけ事前にお申し込みください。当日参加も歓迎いたします。

主催　京都三大学教養教育研究・推進機構（京都工芸繊維大学、京都府立大学、京都府立医科大学）
後援　京都府、公益財団法人大学コンソーシアム京都

（5）平成 29 年度における新たな取組の検討と新設科目

平成 29 年度は、文部科学省大学間連携共同教育推進事業補助金が終了し、新たなステージにおいて共同化事業が進められる初年度となる。

このことを踏まえ、今年度当初から、平成 29 年度の事業のあり方や展開方法について、3 年間の共同化事業における成果や課題を検証しながら、協議・検討を進めてきた。

今後の事業運営に関する方針・方向性などの重要課題については、まずは、三大学担当副学長会議において協議し、その後、具体的な展開方策について担当副学長及びリベラルアーツセンター長・教育 IR センター長会議において検討を加えるとともに、必要に応じ、リベラルアーツセンター会議や教育 IR センター会議などで議論が重ねられた。これらの協議内容については、定期的に開催される運営委員会に随時報告するとともに、同委員会において、最終的な確認や決定が行われた。（開催状況は、資料編を参照いただきたい。）

以上のような協議を経て、来年度は、今年度の共同化科目 74 科目を 80 科目に拡充するとともに、これまでは、月曜日午後の 3 コースから 5 コース並びに夏期・冬期休業期間中の集中講義での共同化授業であったものを、来年度からは、上回生科目を中心に 6 科目について、月曜日の午前にも開講することとした。

また、三大学教養教育共同化が展開される以前から三大学間で実施されていた単位互換制度については、履修登録時期が 4 月の 1 回のみであったものを、前期と後期、それぞれの時期に、共同化科目の履修登録に合わせ実施することとし、学生の登録時における利便や登録機会の拡大を図ることとした。

このように、共同化授業と単位互換の両制度が相俟って、それぞれが十分に機能を発揮することで、三大学教養教育共同化事業が一層充実・発展するように取り組むこととした。

なお、来年度における共同化科目の拡充内容は、次のとおりである。

共同化科目の特徴の一つである『リベラルアーツ・ゼミナール』については、今年度 9 科目であったものを 11 科目に、『京都学』科目も 12 科目から 15 科目に増設した。また、語学・異文化理解科目など上回生対象の高度教養教育科目も、3 科目であったものが 8 科目へと拡大し、学び続ける教養教育が更に進められることとなった。

このほか、三大学の専門性を活かした科目提供やフィールドワークを取り入れた科目の充実、地域金融機関の協力を得て開講する科目などが新設されることとなった。

このことにより、「人間と文化」科目群 29 科目、「人間と社会」科目群 26 科目、「人間と自然」科目群 25 科目の合計 80 科目を開講することとなった。これは、平成 26 年度の共同化開始年度における 68 科目から 12 科目増加したこととなる。

新設された共同化科目（8 科目）の概要

（1）語学・異文化理解科目の拡充（3 科目）

「映画で学ぶ英語と文化」：『風と共に去りぬ』などの映画を通じ、リスニング・スピーキング能力の向上とアメリカ文化や歴史を学ぶ。

「映画で学ぶドイツ語と文化」：『点子ちゃんとアントン』などの映画を通じ、読解力と聴解力の向上を目指す。

「フランス語圏の文化とジャポニスム」：フランスを中心に展開されたジャポニスムという芸術運動を通して、フランス語圏の文化や言語を学ぶと

ともに、よりよい異文化交流のあり方を考察する。

上記 3 科目は、上回生向けの高度教養教育科目と位置付け、英語とドイツ語は京都府立大学教員が、フランス語は京都工芸繊維大学教員が担当する。

(2) 三大学の専門性を活かした科目の開講

「京都学・歴彩館ゼミ」: 稲盛記念会館に隣接し、京都の文化・学習交流拠点として新たに整備された京都府立京都学・歴彩館が所蔵する古典籍・歴史史料・行政文書に実際に触れながら、その扱い方や活用法について、同館職員の協力を得て京都府立大学教員がリベラルアーツ・ゼミナールとして講義を行う。2 回生以上が対象で、『京都学』に位置付けている。

「京野菜を栽培する」: 京都市内の圃場をフィールドに、8 月から 12 月にかけ、実際に大根・ブロッコリー・蕪などを栽培し、農作業を通じて、その作業の持つ意味を科学的な側面からとらえる。京都府立大学和食文化研究センターが授業を担当する。本科目は、『京都学』に位置付けている。

「医学概論」: 医工連携、医福食農連携など、将来において学生が幅広い分野で活躍するためにも、医学の知識は重要な基盤となる。基礎医学、社会医学、臨床医学などをトピックとして講義することで、医学と実社会との関わりを学ぶ。京都工芸繊維大学及び京都府立大学の 2 回生以上を対象に、最新の臨床現場や最先端の医学研究に関わる京都府立医科大学医学科教員がリレー形式で講義を行う。

「環境論」: 地球温暖化などグローバルな視点からの環境問題や現代社会における食と暮らしの安全・安心、環境と経済との関係や環境思想の流れ、環境問題への市民の取組などを京都府立大学教員が講義を行う。本科目は、これまで京都府立医科大学看護学科学生を対象に開講していたものを、来年度から三大学の学生全てを対象に講義するものである。

(3) 地域金融機関との連携による科目開講

「京都の経済」: 平成 28 年 7 月、株式会社京都銀行と京都府公立大学法人・京都府立大学・京都府立医科大学が、各機関が持つ資源を効果的に活用し、地域創生の一層の推進を図ることを目的に、包括連携・協力協定を締結した。その協定に基づく人材育成の取組の一環として、京都経済に関わる幅広いテーマとベンチャー企業支援や観光支援など同行の様々な取組について、京都府立大学教員のコーディネートのもと、毎回、同行職員をゲストスピーカーに迎え講義を行う。なお、本科目は、『京都学』に位置付けている。